DOI：10.20776/S24326291-7-P109

海外日本語学習者の言いさしと応答発話
―オンライン接触場面の会話を中心に―

高　民定[1)]・崔　英才[2)]
[1)] 千葉大学国際学術研究院　[2)] 淮陰師範学院

Sentence-final ellipsis (*iisashi*) and response utterances of overseas learners of Japanese: Focusing on online contact situations

KO Minjeong and CUI Yingcai

要旨

日本語の会話には文末を最後まで完成させないで省略する形の言いさしが頻繁にみられる。言いさしは会話において話者交替を促進する働きをしていることから、日本語の会話習得には欠かせない要素となっている。しかし、日本語教育における言いさし研究はまだ十分ではなく、とくに、海外の学習者を対象とした調査・研究はほとんどなされていないのが現状である。本研究では、日本語教育の多数を占める海外の学習者と日本語母語話者とのオンラインによる接触場面の会話において、言いさし使用とその応答をめぐってどのような言語問題が起こっているかを明らかにする。具体的には、２者間の初対面の接触場面の６組の15分間の日本語の会話をデータとして収集し、分析を行った。また分析においては、母語話者の言いさしに対する学習者の応答発話とその連鎖に注目し、５つの言いさしの応答タイプ別にみられる言語問題を明らかにした。さらに、本研究では、オンラインという対面会話とは異なる接触場面の環境と、海外学習者の学習環境と関わる母語話者との接触経験の有無が言いさし習得にどのように関係しているかについても分析・考察を行った。その結果、オンライン会話では、母語話者は言いさしの後の「間」や「笑い」など終了マーカーを積極的に使うことで、発話終了であることを明瞭化し、それにより言いさしのターン交替の機能を果たす調整をしていることが明らかになった。また接触経験のある学習者の言いさし使用の場合、言いさしの後の母語話者によるターン交替がスムーズに行われ、円滑な会話進行につながっていることが明らかになった。

キーワード
言いさし、海外日本語学習者、オンライン会話、接触場面、接触経験

1．はじめに

言いさし形を伴った発話は、情報確認などの発話上の意味機能に加え、発話終了のマーカーとして使われることから、会話進行上においては話者交替を促進する機能を果たしていると言われる（高木2012）。こうした言いさし機能は、日本語教育ではあまり教えられておらず、日本語学習者にとってはなかなか習得が難しい（e.g.柏崎1993）。そのため、言いさし発話に対し、期待される応答ができなかったり、沈黙が起きたり、会話が円滑に進まないという問題が起きている（高2020）。

とくに、近年増えつつあるオンラインによる接触場面の会話においては、対面の会話とは異なる言いさし発話の連鎖や言語問題がみられると予想されるが、その詳細についてはまだほとんど取り上げられていない。本研究は、日本語学習者の多数を占める海外の学習者と日本語母語話者とのオンラインによる接触場面の会話において、会話の参加者がどのように言いさしを使用し、それに対し、どのような応答発話がみられるかを、発話連鎖と相互行為の視点から分析・考察する。またその際、オンラインという対面会話とは異なる接触場面の環境や、海外学習者の問題となる母語話者との接触経験の有無がどのように言いさし使用に影響しているかをもみていく。これらの分析を踏まえ、最終的には日本語学習者の言いさしに関する習得問題と日本語教育への示唆を考えたい。

2．先行研究

本章では、本研究の理論的背景となる先行研究について考察を行う。具体的には、言いさしの定義と認定条件、相互行為から捉える言いさしの機能と応答発話のタイプ、さらに、接触場面における参加者の言いさし使用にみられる特徴、本研究の調査対象となるオンライン会話の制約と調整行動の特徴を中心に考察を行う。

2.1　言いさしの定義と認定条件

文末が省略され、従属節だけで終わっている、いわゆる中途終了の形の発話に関する研究は、これまで統語論的な視点をはじめ、語用論、談話管理やポライトネスなどの視点から取り上げられてきており、そのアプローチによって用いる用語も定義も少しずつ異なる。陳（2000）は言いさしを「中途終了型発話」と呼び、文法的には言い切っておらず不完全な発話であるが、情報伝達においては不完全なところは何もなく、言い終わっているものとして捉える。また、荻原（2015）は、言いさしを幅広く実体に近い形で捉えるため、文の途中で話を終えてしまい、最後まで文を完成させないで省略する、いわゆる中途終了文すべてを含むものとして定義している。

本研究は会話における言いさし発話と応答のやりとりに注目しており、会話の実体に近い形として陳と荻原の定義を援用しながら、言いさし発話を「発話の形としては未完結で

あっても、話者の発話意図としては言い終わっているもの」とする[1]。また言いさし発話の認定については、高木（2012）を参考に形態・統語論、話者交替と音声、発話意図伝達などの条件をもとにする[2]。そのうえ、分析となる会話がオンラインによるものであることから、話者交替や音声の他にも間の取り方をも考慮しながら認定を行う。詳細は3.調査方法のところで述べる。

2.2　言いさしの機能と応答発話のタイプ

言いさしの機能については、言いさしの代表的な形、例えば、「けど」「から」「たら」などを中心にその語用レベルからそれぞれの意味機能を指摘した研究が多い（e.g.白川2009, 楠本2015、朴2008）。なかでも、「けど」に関しては、談話機能の視点から取り上げることが多く、白川（2009）は、「けど」節の談話における機能は、聞き手の認識状態を変えて結果的に何らかの行動を促そうという態度を明示的に示している点であるとしている（p.33）。

さらに、永田（2015）は談話展開の視点から言いさし表現としての接続助詞「けど」の働きを分析しており、「けど」の後には全ての場合においてターンの移行がみられ、ターンを明示的に譲渡する指標として機能することを指摘している。

また「けど」を含む言いさしの談話上の働きに関しては、高木（2012）において指摘されている。高木は言いさし発話は話し手の発話意図が相手に推測可能なもので、意味によって区切りが明らかな発話であるとしている。つまり、聞き手が省略された話し手の意図を推測可能として捉えていることは、言いさしが会話進行において単純に話者交替に留まらず、発話権（ターン交替）[3]をもった話し手の交替までを含むものとして捉えることを示唆するとしている。

一方、会話の相互行為の視点から言いさし発話をみると、言いさし発話に対する聞き手の応答発話と、その一連の発話連鎖にも注目する必要がある。荻原（2008）は、発話解釈の観点から会話における言いさし発話を含む発話の連鎖に注目しており、聞き手の応答の内容や発話の機能から先行する言いさし発話の機能を推測判断できるとしている。

また荻原は、「言いさし発話の機能を確定・成立させているのは、言いさしをしている話し手だけではなく、それを受けている聞き手の言いさし発話に対する推察能力と言える」（荻原2008：22）とし、聞き手が言いさし発話をどのように解釈し、対応していくのかをみることが重要であるとしている。

こうした言いさしの応答に注目した研究はまだ少ないが、辺（2020）と高（2020）がある。辺（2020）は言いさし発話に対する聞き手の反応について注目しており、言いさし応答について、相づちという最小限の応答を示す、いわゆる「義務的発話形式」が付加されて現れると指摘している。そして、聞き手の「義務的発話形式」が要求される状況において聞き手が反応を示さないと、次の発話連鎖において話し手は会話の内容から外れた発話形式で聞き手への注意喚起をし、反応を引き出していると述べている（p.9）。さらに、辺は、

言いさし発話の後に展開される発話のやりとりは、多様な可能性を含むものであり、その展開の中心となるのが次のような言いさしの後の応答タイプであるとしている。

（1）応答しない

（2）相づちのような応答をする

（3）発話権をもち、新しい話題で発話を開始する。

上記の辺（2020）が示した聞き手の応答タイプのうち、（2）の「相づちのような応答」は、相づちの応答といっても、「はい」や「ええ」のような相づちのみの応答の形もあれば、相づちの後に関連するコメントを付け加える形もあり、実際の応答の形はより多様であると考えられる。また聞き手による何らかの応答発話があった場合、聞き手に発話権が移行された形の応答もあれば、相づちのみの応答発話のように話者が交替するだけで発話権はそのまま話し手にある場合もある。

一方、高（2020）は接触場面における母語話者と非母語話者の言いさしの応答における発話機能を分析している。それによると、言いさし発話に対し、母語話者は相づちによる意思表明を示すだけの応答が多かったのに対し、非母語話者は相づちによる応答だけではなく、話し手へのさらなる情報を要求する応答が多かったとしている。

またこのような結果がみられたことについて、高は会話進行における言いさし発話を捉える聞き手の解釈が母語話者と非母語話者とで異なっている可能性を指摘しているが、なぜそのような違いがみられたかについての要因までは指摘していない。その要因については森（2015）からヒントを得ることができる。森（2015）は「言いさし」を「完全文」との対比の形で定義すると、実際の進行中の行為の途中で言いかけてやめる、というようなことをしていることになり、つまり、会話分析でいう自己修復（self repair）の一種と区別が曖昧になってしまうことを指摘している（p.41）。森（2015）の指摘に従うと、高の調査で非母語話者の言いさしに対する母語話者の応答が相づち的な発話に留まることが多かったのは母語話者が非母語話者の言いさしの一部を自己修正的な行為の一つとして捉えていたためであると解釈できる。つまり母語話者は接触場面の会話であることから非母語話者の言いさしを言いさしの本来の働きではないものとして解釈していた可能性が考えられる。以上、先行研究からは言いさしの会話における働きをみるには、聞き手の応答を含む発話まで捉える必要があること、また接触場面では話し手の言いさしが異なる意味機能として解釈されることもあることが分かった。一方、日本語の会話に慣れていない日本語学習者にとっては話し手の言いさしの発話意図を読み取ったり、適切な応答をすることがなかなか難しく、習得も困難であると考えられる。

2.3　オンラインによる接触場面の会話の特徴

尹（2004b）は、ビデオ会話システムを使った会話場面について、「視覚と聴覚の空間を同時に提供できるとはいえ、遠隔コミュニケーションには映像や音声などのシステム的

制約が存在するため、対面の場合とは異なるコミュニケーションをせざるを得ない」と述べている。またその理由として、視線の不一致や映像、音声の時間的ずれ、空間の非共有による心理的距離感など、オンライン上の制約を挙げている。とくに、音声や映像の時間的ずれは、ターン交替がうまく出来なかったり、同時発話や不自然なポーズが出現したりするなど、会話進行や相互行為に影響を与えるとしている（p.38）。

一方、吉田（2013）はオンライン会話では対面性構築のためのコミュニケーションが特徴的に現れる会話構造になっていると指摘している（p.32）。つまり、「対面ではない状況」を補うための様々な調整がオンライン会話にはみられるという。

こうしたオンライン会話における対面性の構築のための調整行動は、村岡（2020）でもその可能性が指摘されている。例えば、オンライン会話の制約により発話のタイミングがずれるために共同で発話を構築することが難しく、聞き手側は相づち的な発話やコメントを控えるという調整をしていると述べている（p.28）。

また話し手も聞き手側の応答を期待できないことから自分の発話をできるだけ自己完結的に終了させるという調整がみられることを指摘している。とくに、対面でもオンラインでも接触場面の会話に慣れていない中級日本語学習者の場合、会話の進行を母語話者に任せており、母語話者や上級話者にみられている、対面場面のようなターン交替を意識した調整がほとんどみられないと述べている。

以上のことから、同様の振る舞いと要因は、対面会話に頻繁に使用され、会話進行にも密接に関わっているとされる言いさし使用においても現れると予想される。

３．調査概要

本研究では日本の大学生と、中国の大学で日本語を学習している中上級と上級レベルの学習者を対象に、Zoomを使った２者間の初対面の接触場面を調査した。具体的には、15分間の会話を計６組の調査協力者にやってもらい、それを会話データとして収集した。日本語母語話者は計５名で、うちJP１には２回依頼し、連続２名の学習者と会話をしてもらった。

3.1　調査協力者

ペアとなる母語話者と学習者はいずれも学部生または修士１年生、卒業したばかりの社会人であり、全員同年代（20代）の者同士となる。中国人日本語学習者の６名のうち、５名は日本語能力試験（JLPT）N１、１名はN２に合格しており、全員渡日の経験はなく、日本人との対面における接触経験もほとんどない[4]。

今回の調査ペアは性別に設けず、性別要因が言いさし使用に及ぼす影響は扱わないことにする。以下の表１は学習者の調査協力者のプロフィールをまとめたもので、日本語母語話者との接触経験に関しては、①対面における交流、②オンライン会話の交流、③SNSの

文字交流の三つに分けて、それぞれの接触頻度を協力者の自己報告に基づいて記した。その結果、CN１、CN２を除いて、オンラインやSNSを介したコミュニケーションに参加した学習者が多く、間接的であるとはいえ、接触場面に参加していると言えよう。一方、今回の調査協力者となる日本語母語話者は、全員大学生（20代）で、全員女性である。

表１：日本語学習者と日本語母語話者のプロフィールと会話ペアの詳細

NO.	学習者・身分	学習歴	接触経験（①対面交流、②オンライン会話による交流、③SNS文字による交流）	母語話者・身分
1	CN１（男） 大学生	４年	①②③いずれも無	JP１（女） 大学生
2	CN２（女） 大学生	４年	①②③いずれも無	JP１（女） 大学生
3	CN３（女） 大学生	５年	①②無、③たまに日本人教師生と事務的連絡をする程度	JP２（女） 大学生
4	CN４（男） 大学生	３年	①②無、 ③週１～２回、毎回２時間	JP３（女） 大学生
5	CN５（女） 大学卒業、就活中	４年	①無、②月１回、毎回２時間 ③週３回、毎回１時間	JP４（女） 大学生
6	CN６（女）大学院生	４年	①無、②月１回、毎回１～２時間、 ③毎日30分	JP５（女） 大学生

3.2　調査の手順

本調査は、海外の日本語学習者と日本の大学生との異文化交流を兼ねた企画の中で行っており、最初の20分くらいは、日本と中国の大学の教員同士がそれぞれの大学の紹介をしながら、中国と日本の状況ついてそれぞれの学生と４人で自由に話し合った。その後、映像をオンにして日本語学習者と日本語母語話者だけの２者会話を15分間やってもらった。会話は基本的に自由会話で依頼したが、話題が無くなったときのために調査者側が予め用意したいくつかの話題も提供した。会話の収録は、2021年９月中旬から末にかけて行ったものである。

3.3　文字化

会話収録は開始から15分当たりまでを切り取り、宇佐美（2011）の基本的な文字化の原則を参考に文字化を行った。オンライン会話はその言語環境上対面会話と違う特徴を持つ。例えば、視覚的に会話相手の視線や表情が分かりにくいため、身体性の提示が制約されて

いる。したがって、会話参加者はそうした制約された身体性の表示、すなわち、非言語情報から言語情報を予想することは難しい。

本研究では文字化を行う際に動画データをもとにしたものの、非言語による言語情報を文字化資料に反映することは極めて困難であると判断し、主に音声に基づいた文字化を行ったことを断っておきたい。またオンライン会話では上記でもみてきたようにオンライン会話による制約を調整するために話者は、なんらかの方法で自らのターンを管理していると予想される。本研究ではこのようなオンライン会話独自の発話特徴を反映するために、宇佐美の一発話文の認定要素「話者交替」と「間」を考慮に入れて、一発話文の認定を行った。その結果、オンライン会話では発話の産出過程に「間」が積極的に使われていること、またその「間」によって一発話文が区切られることから、発話文は短くなって終わる傾向があることが分かった[5]。文字化の記号凡例は本紙の最後に載せておく。また会話例における発話は、ライン番号を使い表示する。

3.4　分析の枠組み－本研究における聞き手の応答発話のタイプ

１のはじめにでも述べたように、本研究は、オンラインの接触場面の会話における言いさしと、その応答発話をめぐる相互行為を捉えることを目的としている。とくに、聞き手となる日本語学習者の言いさしの応答発話に注目し、応答発話のタイプによってどのような言語問題が生じているかを明らかにすることを課題としている。そこで、本研究では、聞き手の応答発話のタイプについて、2.1で行った辺（2020）の応答タイプの考察を参考に、言いさしに対する予測可能な聞き手の応答発話のタイプを、ターン交替の有無と応答の発話内容を基に次の５つのタイプに分類する。

タイプ１：聞き手の応答がないため、話し手が再びターンを取る
タイプ２：相づちの応答をする
タイプ３：相づちに加え、コメントや情報提供を加える（話し手は変わらない）
タイプ４：聞き手が話し手に変わり、先行する話題に関連する発話を開始する。
タイプ５：聞き手が話し手に変わり発話権をもち、新しい話題で発話を開始する

タイプ１は聞き手の応答がなく、話し手の言いさしが期待された相互行為としてうまく機能していない。その結果、話し手が再びターンを取ることになっており、補足説明などによって反応を促す手続きをするという発話の連鎖が予想される。タイプ２は、聞き手の相づちによる応答がきており、その相づちの応答を受けて、話し手が再びターンを取るか、または聞き手が相づちによる応答のあと、自らターンを取り、新しい発話の連鎖を開始する[6]。タイプ３は、言いさしの後に発話権は移動していないが、話者が交替されており、言いさしは聞き手のより実質的な反応を引き出すための相互行為の資源[7]（横森2018）として使用されている。タイプ４は実質的なターン交替が行われ、しかも先行発話と関連する応答であることから、話し手の言いさしはタイプ３に比べ、より実質的なターン交替の

資源として使用されていると言えよう。タイプ５は、言いさしによるターン交替が行われるものの、後続発話が言いさしと関連する内容ではなく、新しい話題としての応答となっている。すなわち、応答発話で新しい発話連鎖が開始されており、新たな相互行為の展開を促す資源として言いさしが使用されていると考えられる。

４．分析結果

本節では、研究目的と関連する３つの課題（4.1から4.3）についての分析結果をまとめる。まず、4.1では日本語母語話者の言いさしに対する学習者の聞き手としての応答発話と、その連鎖にみられる言語問題について、５つの応答タイプの事例を取り上げ分析・考察する。その際、言いさしを使用した話し手の発話は太字にして網掛けをし、応答をする聞き手の発話は太字にし、下線を引く。次に、4.2では、オンラインの制約による話者の調整をみるために、母語話者の言いさしの調整について取り上げる。最後の4.3では、対面と非対面を含めての学習者の学習環境と関わる接触経験の有無が言いさし使用にどのように影響しているかについての分析結果を述べる。

なお、本研究は言いさし発話をめぐる連鎖の事例分析に注目しているため、言いさし使用の量的分析は行っていないことを断っておきたい。

4.1　言いさしに対する学習者の応答発話と言語問題

（１）聞き手の応答が現れないタイプ１

今回のオンライン会話においては、話し手となる日本語母語話者の言いさしの発話に対し、聞き手となる学習者からは応答がないため沈黙が起こり、母語話者が再びターンを取り、再度言いさしを使用し、聞き手の応答を引き出そうとする調整（連鎖軌道の修正）がよくみられた。例えば、以下の例１の185行目のCN３の沈黙が起きる箇所がその事例にあたり、JP２の言いさしに対し、CN３はタイプ１の応答が欠けている。

例１：コロナウイルス感染症の予防接種について
（データ３、JP：日本語母語話者　CN：日本語学習者）

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発　話　内　容
180	177	*	CN３	《沈黙２秒》じゃあ日本の皆さんはわく、ワクチンを注射（‘ちゅうしゃく’と発音する），ことありますか？。
181	178	*	JP２	今、だいたい国民の六十パーセント…ぐらい［↑］，が（あー），ワクチン打ったと思います。

182	179	*	JP 2	たぶん。
183	180	*	CN 3	あー、おも、思う以上ですね。
184	**181**	*	**JP 2**	**結構多い［↑］, のかな［↑］, 分かんないですけど。**
185	**182**	*	**CN 3**	**《沈黙》。**
186	**183**	*	**JP 2**	**でも、でもなかなか、感染者が減らないと、やっぱり。**
187	**184**	*	**CN 3**	**はい、それは。**
188	**185**	*	**JP 2**	**あんまり遊べないなっていうのなって<少し笑いながら>。**
189	186	*	CN 3	ふーん、自分の安全も（<笑い>）、注意することが必要です<少し笑いながら>。

例１は、日本でのコロナウイルス感染症の予防接種の状況についてやり取りしている場面である。JP２は、184行目で「結構多い［↑］, のかな［↑］, 分かんないですけど。」と、60％という接種率が多いほうかどうか分からないという応答をしている。その際、JP２は「分からないですけど」と言いさしの形で発話を終わらせている。JP２による言いさしは発話の内容通り、接種率が多いかどうかの判断を聞き手に委ねながら、ターンを渡す準備をしているようにみられる。

しかし、聞き手となるCN３は、185行目において何の応答もせず、沈黙が続く。それに対し、JP２は186行目で「でも、でもなかなか、感染者が減らないと、やっぱり。」と発話を切り出しており、その際、再び言いさしによる発話で相手の応答を誘っているのがみられる。そこでようやく、聞き手となるCN３は187行目で「あー、それは。」と応答している（これはタイプ２に当たり、後述する）。しかし、それはJP２にとって、十分な応答にならなかったのか、JP２が再び188行目でターンをとり、先行する186行目において省略していた「感染者が多いとあまり遊べない」という情報を自ら付け加えているのが観察される。ここで母語話者による188行目の言いさしは189行目においてCN３の応答を引き出すことに成功する。

こうした一連の発話の連鎖において興味深いのは、JP２は何度も言いさしの形を使用していることである。それには、おそらく、JP２がCN３の日本の接種率に関する質問を受け、その接種率が高いほうに当たるかどうかの判断に自信がなく、相手の同意を誘う形で発話を展開しようとした話し手の意図が関係していると考えられる。つまり、ターン交替が可能な言いさしを用いて、実現しようとしているが、こうした期待に対し、聞き手となる学習者は、最初の応答の欠如（185行目の沈黙）に続き、その後の187行目においても十分な応答を返すことには至っていない。そこで、JP２はCN３がターン交替が可能な言いさしの機能が認知できていないことを逸脱として留意し、その結果、自らターンを取り、

発話を続けることで聞き手の応答を引き出す調整をしていたと解釈できる。このようにタイプ１の言いさしの応答の例からは、会話における言いさしの働きをめぐって母語話者と学習者の間に理解のキャップがあることが示唆される。

（２）相づちのみの応答をするタイプ２

本研究では、母語話者の言いさしに対し、学習者は「はい」のような短い相づちのみの応答をしている例が頻繁にみられた。学習者のこのような応答は言いさしの話し手となる母語話者には話を続けるというサインとして理解され、再びターンを取るという会話展開の調整につながっていることが分かった。

一方、学習者により相づちのみの応答が頻繁に見られたのには、言いさしに伴うターン交替の機能が十分に理解できていないという言語問題があることを示唆する。次の例２は相づちのみの応答に対し、母語話者がどのように自身の発話を調整しているかがみられる。

例２は学習者が母語話者にワクチン接種とその副反応について聞いている場面で、JP３の言いさしに対し、CN４がタイプ２の応答をしている。

例２：ワクチン接種とその副反応（データ４）

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発　話　内　容
102	96	*	CN４	JP３さんはどうですか、そういう症状が、さ、 ありますか？。
103	**97**	*	**JP３**	**私は、なんか軽い副反応軽いって聞いてたので。**
104	**98**	*	**CN４**	**はい。**
105	99	*	JP３	ちょっと、きも、軽かったんですけど、 二回目ちょっとめっちゃビビってます。
106	100	*	CN４	はいはい、はいはい。
107	**101**	*	**JP３**	**今、実家から離れて一人で, 住んでる一人暮らししてるんですけど。**
108	**102**	*	**CN４**	**はい。**
109	**103**	*	**JP３**	**もうしんどい時助けてくれる（<笑い>） 友達がいないんで、親もいないし。**
110	**104**	*	**CN４**	**はいはい。**
111	105	*	JP３	心配です。
112	106	*	CN４	はいはいはいはい。

113	107	*	CN４	まあ、その…日本のワクチンはあのその副作用がすご、すごいって聞きました、はい。
114	108	*	CN４	そのうん、打てばその味覚そう、喪失とか、あの熱が出るとかあのいろいろまあ症状が出てる、それは大変だと思います、はい。

例２はCN４が102行目の発話でJP３に対し、ワクチンの打った後に副反応があったかを聞いている。それに対し、JP３は、103行目から109行目にかけて副作用について話しており、一連の言いさしが使用されている。まず、JP３は最初の103行目で「副作用が軽いと聞いたので」と言いさし発話にしており、そのあとも107行目で「一人暮らしをしてるんですけど」、109行目で「友達もいないんで、親もいないし」と、言いさしを用いて聞き手の応答を引き出そうとしている。それに対し、CN４は104行目、108行目、110行目で「はい」または「はいはい」と短い相づちだけの応答をしている。このCN４の「はい」の相づちは、対面場面においては話し手に対し、発話の継続を促すというサインにもなるため、JP３は105行目ではっきりと間を置きながらターンを取り、話を続けている。

一方、言いさしと言い切りに対するCNの相づちの応答の仕方には違いがみられる。発話が終わっていることが明確なところで、CN４の「はい」の応答は「はいはい、はいはい」と繰り返す形で打たれている（106行目、112行目）。それに対し、言いさしのような文末の終わり方では、「はい」の応答は「はい」または「はいはい」１回のみで終わっている。繰り返しの「はい」に対し、JP３は、同じタイプの相づちの応答として認識し、その後に107行目のように再びターンをとったりするが、「はい」の繰り返しの応答をしていたCN４からすると、繰り返しの「はい」の後は自分でターンをとる準備をしているという合図となっている。というのもCN４は多様な「はい」を使っており、中でも繰り返し「はい」が見られる場合には、直後に自らターンを取る行為がしばしば行われている。このことから112行目でCN4による「はい」はこれからターンをとる準備をしている合図として判断できるだろう。

しかし、このようなCN４の言いさしに対する「はい」の応答の意図は、JP３には伝わらず解釈にズレが生じている。また話し手の言いさし発話に対し、聞き手は相づちのみで応答し、話し手が再び新しい質問をする発話連鎖もみられる。つまり、タイプ３のような応答を期待していたが、期待された応答が得られなかったために、言いさしの話し手は自ら新しく質問することで、新たな発話連鎖を開始する調整をしていたと考えられる。

以下の例３はCN５が漫画の主人公のキャラクターについて話している場面で、JP４の言いさしに対し、CN５がタイプ２の応答をしている。

例３：漫画の主人公のキャラクター（データ５）

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発　話　内　容
39	38	＊	CN５	はいはい、あのその狼のきゃらっく、 キャラクターが大好きです。
40	39	＊	JP４	あ、そうですね、あーレゴシ聞いたことあります。
41	40	＊	CN５	はい、レゴシ、レゴシ君が優しいです、ふふふ。
42	41	＊	JP４	はは、見たことはなくて、曲だけ知ってるんですよ、 私は。
43	42	＊	CN５	はい。
44	**43**	＊	**JP４**	**でもなんかその、曲を聴いてたら、 なんとなく関連で動画が出てきたりしたので。**
45	**44**	＊	**CN５**	**はい。**
46	**45**	＊	**JP４**	**ちらっと見たことあって。**
47	**46**	＊	**CN５**	**うん。**
48	47	＊	JP４	えっ、CN５さんは、なん、 夜遊びだとどの曲が好きなんですか？。
49	48	＊	CN５	あー、怪物とあの, 優しい彗星［↑］。

例３でJP４は44行目で「曲を聴いてたら、なんとなく関連で動画が出てきたりしたので。」と述べ、「ので」の形の言いさしを使用している。それに対し、CN５は45行目で「はい」と応答だけをしており、そこでJP４は、46行目で「ちらっと見たことあって」とまたも言いさしの形で、動画が出てきたことをちらっとみたことがあるという情報を提供している。

しかし、JP４のこの発話に対し、CN５はまたも47行目「うん」と相づちのみの短い応答をしており、JP４は48行目で再び「えっ、CN５さんは、なん、夜遊びだとどの曲が好きなんですか？。」と新たな質問をし、新しい発話連鎖を開始している。このように話し手の言いさしに対し、聞き手となる相手は、聞き手の立場から相づちのみの応答をする場合があるが、言いさしの話し手としては相づちだけではなく、相づちに加え、何らかのコメントの発話も期待していたかもしれない。

（３）相づちに加え、コメントや情報提供を加えるタイプ３（話し手は変らない）

ここでは、話し手の言いさしに対し、聞き手は相づちだけではなく、コメントや先行発話と関連する実質的な発話を応答として出している。実質的な発話で応答していることか

ら聞き手が話し手に変わり、発話権を持ってその後の発話をリードする期待されるが、発話権の移動はなく、つまり話し手は変わらず、聞き手はただ応答発話をするために一時的に話し手になっている。以下の例４はJP５の言いさしに対し、CN６がタイプ３の応答をしている事例である。

例４：留学先について（データ６）

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発　話　内　容
107	107	*	CN６	あー、じゃー、もし留学に、あのー行けーるとしたら、どこが一番行きたいですかね？。
108	108	*	JP５	うーん、今私がの専門というか、 専門で勉強してる外国語が英語なので。
109	109	*	CN６	あー。
110	110	*	JP５	英語…そう英語話す国とか、まあ英語が強い国みたいなのがいいかなと思ってるんですけど。
111	111	*	CN６	<うんうんうん>{<}。
112	112	*	JP５	<具体的には>{>}決まってないですね。
113	113	*	CN６	<あー>{<}。
114	**114**	*	**JP５**	**<たくさん>{>}国はあると思うんですけど、ふふふ。**
115	**115**	*	**CN６**	**ふふふ、そうですね、英語で、 英語話す国はいっぱいありますね。**
116	116	*	CN６	《沈黙0.5秒》うーん、で英語は本当上手じゃないですかね、英語<少し笑いながら>。
117	117	*	JP５	いや、いや、どうだろう。
118	118	*	CN６	ははは。

例４は留学先について話している場面である。CN６は107行目でJP５に留学に行けるとしたら、どこの国に行きたいのかを尋ねている。それに対しJP５は108行目で「専門で勉強しているのが英語なので」と応答しており、その後、110行目で英語が強い国に行くのがいいけど、決まってはいないと述べている。それに対し、CN６は114行目で「たくさん国はあると思うんですけど、ふふふ」と話している。

例４の会話では114行目の他にも108行目と110行目でJP５が言いさしを使用しているが、前の108行目と110行目の言いさしに対する応答は相づちのみで終わっているのに対し、114行目の言いさしに対しては、３つ目の応答タイプ、すなわち、相づちの応答に加え、

115行目で「そうですね、英語で、英語話す国はいっぱいありますね」というコメントも付け加えている。

ここでは、JP５の言いさしが連続することでターンの話題がほぼ終わりになったことがCN６にも認識されたこと、さらに、笑いによって明瞭に終了シグナルが表されたこともCN６の長めのコメントを引き出すことにつながったと解釈できる。

（４）聞き手が話し手に変わり、先行する話題に関連する発話を開始するタイプ４

このタイプは、話し手の言いさしに対し、聞き手の応答が先行する話題に関連する情報提供になっていることで、言いさしによるターン交替が行われている。次の例５は、好きな本のタイプについて話している場面で、JP２の言いさしに対し、CN３がタイプ４の応答をしている事例である。

例５：好きな本のタイプについて話す場面（データ３）

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発　話　内　容
201	198	*	JP２	え、でも私も本読むことは好きです。
202	199	*	CN３	あーそう《沈黙0.5秒》。
203	200	*	JP２	そうなんですね。
204	201	*	JP２	どういう分野が好きなんですか？。
205	202	*	CN３	えっと【【。
206	**203**	*	**JP２**	**】】やっぱりファンタジー…とか、ミステリー,とか。**
207	**204**	*	**CN３**	**あー、私はSF小説、好きです。**
208	205	*	JP２	<あー、SF>{>}、ふふふ。
209	206	*	CN３	だから、えっと同じ、うーん、趣味がある人がちょっと<少しですね>{<}。
210	207	*	JP２	<そうですか>{>}。

例５でJP２はCN３に対し、204行目で「どういう分野の本が好きか」と聞いてから、205行目の「えっと」と発話を開始したものの、直後の206行目によって遮り、発話が中断されている（【【記号）。その後206行目で自ら予想としてファンタジーとミステリーの分野をあげ「やっぱりファンタジー…とか、ミステリー,とか。」と「とか」を用いて言いさし発話をする。それに対しCN３は207行目で「あー、私はSF小説、好きです。」と、JP２の言いさしを受ける形ではなく、「SF小説が好きだ」と関連する情報提供をする形の自己発話を発して応答する。このCN３の応答は「えっと」からつながるJP２の質問に対する応

答（隣接ペア）のようにも見えるが、208行目で「あー」と、新しい談話標識が来ていることから、「えっと」からつながるとはいいにくく、直前の205と206行目の「分野の例示」発話に向けたものであると考えられる。

そして、その後話し手に代わり、209行目から同じ趣味の友達がいないという話の方に発話を展開している。ここでのCN３の応答は、204行目から始まった一連の質問に対する補足説明・コメントであると考えられる。と同時に、CN３の補足説明の応答は、その後の発話展開を促進することにつながる情報提供ともなっており、このような発話連鎖からは言いさしの発話の後に実質的な発話を伴うターン交替が行われば、その後の会話の展開もスムーズに行われることが裏付けられる。

（５）聞き手が話し手に変わり発話権をもち、新しい話題で発話を開始するタイプ５

言いさしによりターン交替になる場合、そのターン交替後の話題は上記の（４）のタイプのようにそれまでの先行発話と関連した話題で会話をする場合もあれば、次の（５）のタイプのように新しい話題で直接ターン交替がなされる場合もある。次の例６はJP１の言いさしに対し、CN１がタイプ５の応答をしている事例である。

例６：ワクチン接種について（データ１）

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発　話　内　容
6	6	*	JP１	あのー、日本政府が、そう（はい）十一月からワクチン接種したい人…に，優先的になんか旅行とかできるとかするみたいな、政策は言っているので（はい）。
7	**7**	*	**JP１**	**それに期待は、し、期待はしてるんですけど。**
8	**8**	*	**CN１**	**《少し間》えー、ただで接種ですか？。**
9	9	*	JP１	あ、わたし、はい<そうです>{<}。
10	10	*	CN１	<ただで接種>{>}ですか？。
11	11	*	JP１	はい。
12	12	*	CN１	はい、おー分かりました。
13	13	*	CN１	えっと中国の方は、えーワクチン接種をしたら、なんかお金とかもらえるですよ。

例６は、日本でのワクチン接種に関する方針を話している場面で、JP１は６行目でワクチンを接種した人に優先的に旅行できるようになることを期待していると述べており、続く７行目において「それに期待は、し、期待はしてるんですけど。」と言いさしを使用

している。ここでのJP１の発話は６行目の長めの発話の補足で、この補足発話によってターンの終了が明瞭になっている。それに対し、CN１の発話は《少し間》が見られた後、８行目で「えー、ただで接種ですか？」と質問の応答をしている。CN１の質問の応答は、ワクチンの接種という関連する発話であるとはいえ、接種をただでできるかという質問となっており、JP１の先行発話からは少しずれた内容になっている。言い換えると、ここでCN１は言いさしの応答として、ワクチンの費用という自分の関心を持ち込んだ話題で応答している。CN１のこのような応答発話に対し、JP１は少し戸惑いながら９行目で「あ、わたし、はい<そうです>{<}。」と応答しており、それに対し、CN１は再び、質問を繰り返し、確認をしている。このような発話連鎖からもCN１の応答は新しい話題の開始となっていると考えられる。

以上、話し手の言いさし発話に対する予測可能な聞き手の応答のタイプは、学習者の実際の応答においてもみられており、その応答タイプによっては会話の進行上の問題になる場合と、会話の進行を円滑に進める働きになる場合もあることが分かった。

しかし、ここであげた発話例はオンライン会話でみられたものであり、したがって、発話の生成においてはオンライン会話であることを意識した話し手の調整が反映されている可能性も考えられる。次節ではオンライン会話であるという環境が言いさしとその応答発話をめぐる連鎖にどのように影響しているかを本調査の発話例からみていく。

4.2　オンラインの制約による言いさしの調整

2.3の先行研究でも指摘したように、オンライン会話では共同で発話を構築することが難しく、そのため、自己完結的発話が多いと言われている。本研究のオンライン会話においても話し手の言いさし使用において「間」や「笑い」などの終了マーカーを明示的に示すという調整が頻繁にみられている。ただし、その言いさしの後の「間」は、会話において同じような働きをしているのではなく、発話の状況によって異なる働きをしていることが分かった。具体的には、（１）伝達効果の確認、（２）終了マーカーの明示と自己完結の表示、（３）異なる相互認知に対する調整という３つの働きの例が観察されている。以下では、これらの３つの例を取り上げ分析する。

（１）伝達効果の確認

例７：夏休みの過ごし方について（データ２）

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発　話　内　容
3	3	*	CN３	あのー、夏休みは, どう過ごしますか？。

4	**4**	**＊**	**JP 2**	**私は, この大学生の夏休みは、 だいたいサークル活動が忙しくて。**
5	5	＊	CN 3	<あー>{<}。
6	**6**	**＊**	**JP 2**	**<あのー>{>}合宿とか、 練習とかがけっこうあるので。**
7	**7**	**＊**	**JP 2**	**それでほとんど潰れる感じにはなるんですけど［→］。**
8	**8**	**＊**	**JP 2**	**まあ、今はコロナのせ、せいで<少し笑いながら>、 活動できてないので。**
9	9	＊	JP 2	だいたい家で過ごすか、アルバイト, して、 過ごしてます。
10	10	＊	CN 3	えっと、私はこの夏休みは運転免許を（あー）、 取ります。

例７は、会話が始まり、自己紹介が終わった直後にJP２がCN３の質問を受け、夏休みの過ごし方について話しているやり取りである。JP２は４行目で「だいたいサークル活動が忙しくて」と言いさしを用いて答えている。CN３の５行目の発話は直前の言いさし発話と重なるものの「あー」と相づちを用いて応答を返している。JP２は引き続き６行目で「あのー」と発話をつなげ「合宿とか、練習とかがけっこうあるので」と言いさしを用いている。その後の７行目、８行目、９行目ではそれぞれ「けど」と「ので」を用いて言いさしで情報提供を行っている。

これらのJP２の一連の言いさし発話は、発話と発話の間にはっきりと間を置き、区切っており、その際イントネーションも少し上がっているのが特徴的である。このように母語話者は言いさしを用いるとともに、発話間においてはっきりとした「間」を活用することで、オンライン会話における発話の生成を調整している。母語話者のこのような「間」の使用は、終了マーカーとしての働きを担うため、発話をいったん区切ることができる。そうすることにより画面越しにいる聞き手に対し伝達効果を確認する調整を行っていると考えられる。

（２）終了マーカーの明示と自己完結型の表示

本研究のオンライン会話では、話し手は言いさし発話に対して聞き手側の応答を期待せず、言いさしの後に「間」を置くとともに、発話の終了を明示的に示すためのマーカー（e.g.「笑い」で自己完結）を加えるという特徴もみられる。次の例８は、CN５が好きなグルメドラマ「孤独なグルメ」について話す場面で、JP４はオンライン環境であることを意識しているかのように、発話終了を明示的に示すために言いさしの後「笑い」（例８の斜体下線部分）を使っているのがうかがえる。

例８：日本の好きなグルメドラマについて（データ５）

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発　話　内　容
176	**171**	＊	**JP４**	<はははは>{>}、すごい詳しくてびっくりしました、***ははは***。
177	172	＊	CN５	うん、はい。
178	**173**	＊	**JP４**	**孤独なグルメが中国で人気だと思っていなくて、*ははは*。**
179	174	＊	CN５	実は、実は、うんとっても人気がありますよ。
180	**175**	＊	**JP４**	***ははは。***
181	176-１	/	CN５	あのその主人公［↑］,,
182	177	＊	JP４	うん。
183	176-２	＊	CN５	そのー、も、あーさっき言った、あのー、 ビリビリで自分のチャンネルがありますよ。
184	178	＊	JP４	あ、そうなんですね。
185	179	＊	CN５	そうです（うんうん）、そうです、うん。
186	180	＊	JP４	そうなんだ。
187	**181**	＊	**JP４**	**日本、日本のドラマとかやっぱ見れるんだなって思って、*ふふふ。***
188	182	＊	CN５	うん。
189	183	＊	JP４	でも翻訳されてますもんね、ちゃんと。
190	184	＊	JP４	字幕とかでみるんですか？。

例８はCN５が日本のテレビ番組を中国の動画共有サイトbilibiliで見ていて、好きなグルメドラマ「孤独なグルメ」について話している。それを聞いてJP４はCN５が日本のテレビ番組に詳しいことに驚きを示し、176行目で「すごい詳しくてびっくりしました、ははは」と笑いをもって発話の終了を明示的に示している。そのあとの178行目は「孤独なグルメが中国で人気だと思っていなくて、ははは」と、「て」形式の言いさしを用いているが、同じく最後に笑いで自己完結発話にしている。この178行目の後続発話をみると、聞き手のCN５の応答発話179行目「実は、実は、うんとっても人気がありますよ」がきている。しかし、ここは、本来なら、「そうなんですね」のようなコメントや、「そうなんですか」のような相手による情報提供を確認する発話がくることが想定される。にもかかわらず、JP４は180行目でまたも「ははは」の笑いで発話を完結している。同様の例はJP４の187行目の発話でもみられ、「日本のドラマとかやっぱ見れるんだなって思って、ふふふ。」

と笑いによって自己完結している。

ところが、その直後のCN５の188行目においては、ただ「うん」と軽く相づちを打つにとどまっている。そのためJP４は189行目で「でも」という談話標識を用い、関連する情報提供をした後、190行目から「字幕とかでみるんですか？」と新しい質問に話題を変えている。

上記の発話のやり取りから、JP４の178行目の言いさし発話は、聞き手の応答を引き出す目的があったとは認められない。それはCN５の179行目の応答を受けて、180行目で笑いのみで済まし、CN５の応答を受け入れる発話内容はほとんどない点から説明できる。つまり、JP４は終了を明瞭化する文末の「はい」とほぼ同じマーカーとして、言いさしの後に「笑い」を用いるだけでなく、そうすることで自己完結的な発話の形にしている。では、なぜオンライン会話においてこのような自己完結的な発話の調整がみられるのだろうか。いろいろな要因が考えられるが、その一つの要因は、対面場面のような会話を展開するための調整である可能性が考えられる。つまり、先行研究で述べた「対面性の構築」というオンラインの制約を補うための調整である可能性が考えられる。

（３）異なる相互認知に対する調整

ここでは、母語話者が言いさしの後に「間」をはっきりおくことで聞き手の応答を引き出そうとする調整がみられている。つまり、言いさしそのものの調整ではなく、オンライン会話である制約を意識した調整が見られていることである。

3.1で取り上げている例２がそうであるが、例２は、上でも述べたようにJP３が２回目のワクチンの接種で副反応が出ることを心配して話す場面である。紙幅の都合でここでは会話例は再表示しないが、上記で挙げた例２をみると、JP３は発話103で二回目のワクチン接種は副反応が軽いと聞いた話をする発話において、「なんか軽い副反応軽いって聞いていたので」と「ので」形式を用いている。JP３は「ので」の後はっきりと間を置きながら、話しているのが確認できる。

それに対し、CN４は104行目で「はい」と応答しており、相づちのみでの話者交替が行われている。JP３はその後の107発話、109発話においてもそれぞれ「一人暮らししてるんですけど」、「友達がいないんで、親もいないし」と「けど」形式の言いさしと、「し」形式の言いさしを用いており、同じく発話終了においてはっきりと間を置いた形で発話を進めているのがみられる。ここで母語話者のJP３に置いてみられた「間」をはっきりおく調整は、ターンを譲る機能で言いさしを使ったにもかかわらず、相手が「はい」や「はいはい」しか応答しなかったことから、相づちを求める機能として認知されており、それがJP３には二次的な逸脱として留意され、それに対するJP３の調整がみられたと考えられる。言い換えると、ここでJP３は、自分の「言いさし」の機能を、ターンを譲るものではなく、相づちを求める機能に変更し、相手の応答にアコモデーションする二次的な調整を行うことで、会話が途切れないよう、会話の管理を行ったと解釈できる。

以上のようにオンラインであるという会話の環境は、言いさしの後に「間」や「笑い」など終了マーカーを明示的に示すことで、伝達効果の確認や自己完結型の発話、相手の反応に合わせた調整を行なっており、こうした言いさし発話に伴う一連の調整は、オンライン会話による制約を補うための調整であると考えられる。

4.3　接触経験と言いさし

本研究では、上記でも述べたように海外の日本語学習者を対象としたオンライン会話での言いさし使用を分析している。海外の学習者の学習環境は学習者のおかれた地理的、経済的、また対人関係などのネットワークによっても多様である。とくに、日本語母語話者とのネットワークを持ち、頻繁に日本語を使用する環境にある学習者もいれば、中には大学で日本語を学ぶだけで日本語母語話者と直接会話をした経験がない学習者もいる。

また接触経験とコミュニケーションの調整については、母語話者への影響を中心に密接な関連性があることが検証されている（柳田2002、筒井2008）。同様に海外学習者にとっても日本語母語話者との接触経験の有無は日本語の使用や習得に影響すると予想される。とくに、対面会話において出現頻度の高い言いさしの場合、学習者の母語話者との接触経験や学習環境、日本語能力（会話能力）などが関係していると考えられる。以下では、中でも接触経験の有無が言いさし使用にどのように関係しているかを、実際の会話例を通してみてみる。

上記でも述べたように本調査の協力者となった学習者は全員対面場面での接触経験はない人たちである。ただ、学習者の中にはオンライン会話やSNSなどを使った間接的な接触場面の参加を経験している人たちもいる。接触場面で母語話者と会話することは、単純に日本語を話す練習になるだけではなく、会話のスムーズな進行のための様々な会話ルールを身につけられる機会となる。

また会話進行において問題が起こったときに、問題を調整するためのストラテジーを自然習得できる機会にもなりうる。とくに、言いさしは会話の進行に重要な働きをするターン交替に関わる機能も持ち合わせているだけに接触経験の有無は学習者の言いさしの使用にも何らかの影響を与えていると予想される。例えば、次の例９と例10は、接触経験がない学習者と接触経験がある学習者のそれぞれの言いさしの使用を示しており、接触経験の有無によって言いさしの発話連鎖がどのように異なっているかを分析している。

なかでも、本研究の学習者のように接触経験がない学習者２名の場合、事前インタビューにおいて、実際の会話において言いさしが聞き手に対しどのような発話意図をもち、どのような会話展開を相手に示すかまでは十分理解できていないことを報告している。またそれは4.1で挙げた言いさしの５つの応答発話の事例からもうかがうことができる。以下では、それぞれの事例について分析する。

（1）接触経験ない学習者の事例

次の例９は、言いさしの使用が少ない学習者CN２が、「と思いますが」といった決まりきった、つまり、チャンク[8]のような形で言いさしを活用している事例である。

例９：友達にもらった故郷の名物について（データ２）

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発　話　内　容
186	183	*	CN２	内モンゴルの人です。
187	184	*	JP１	はい。
188	**185**	*	**CN２**	**そして、これは彼女の…　故郷の名物、だと思いますが。**
189	**186**	*	**JP１**	**えー、美味しそう。**
190	**187**	*	**JP１**	**ビーフジャーキー…みたいな感じかな。**
191	188	*	CN２	はい。
192	189	*	CN２	私が食べたことがありません。
193	190	*	CN２	えー、固く見えます。
194	191	*	CN２	ふふふ。

例９の前にはCN２が「内モンゴル」の日本語が分からなくて、中国語で寮のルームメートに聞く場面がある。そのあと188行目から、内モンゴルの友達からもらった故郷の名物について話している。ここでCN２は「と思いますが」の言いさしを使ってはいるものの、その発話内容からすると不適切な使用となっている。CN２は「と思いますが」を言い切りのように使用し、新情報提示の発話に用いている。

一方で、JP１は言いさしとして捉えているゆえに、189行目「美味しそう」、190行目「ビーフジャーキー…みたいな感じかな」と、相づちとコメントを用いた応答をしている。しかし、その後のCN２の191行目以降の発話をみると、JP１の同意を求める応答発話が意識できず、191行目「はい」といった不十分な応答や、さらに、192行目「私が食べたことがありません」の情報提示、193行目「えー固く見えます」の情報提示、194行目「ふふふ」の笑いによる自己完結発話を発するなど、一連の自己開示の発話をすることで会話を展開している。この例から学習者の言いさしは初級の文型「と思います（が）」を用いたチャンク形式のものがしばしば使われていることが分かる。

それに対し、母語話者は依然として「チャンクの形」を言いさしとして捉えているため、それに対し応答をすることで、ターン交替により会話を進行させようとしている。しかし、言いさしの機能を適切に理解していない学習者は、母語話者と協力しながら発話連鎖を構

築することができず、その後の発話展開において言いさしを文レベルの処理に留めてしまう可能性がある。

（2）接触経験のある学習者の事例

接触経験のある学習者の場合、母語話者の言いさし発話の後の応答やターン交替がスムーズに行われていることが会話例から確認できる。上の4.1で上げていた例４がそうである。例４で母語話者による言いさし使用が頻繁にみられているが、それに対し、学習者のほうは複数の応答（タイプ１とタイプ３）のタイプを使い、積極的に発話している。CN６は、日本語学習歴が４年の学習者であるものの、最初の日本語学習は日本のアニメやバラエティー等を見ながら独学によるものだったという。CN４は日頃からオンライン上における母語話者の知人と会話をしたり、SNSで書き言葉を使い、週３回以上のペースで交流を続けていると報告している。CN６は今回の接触場面でも母語話者に対し自ら率先して積極的に質問をしたり、会話が途切れないように盛り上げたりするなど、接触場面にかなり慣れている様子が確認できる。CN６ほどではないが、オンライン上における接触経験を持つ、CN５も類似する特徴がみられている。

このような接触経験のある学習者の言いさしに対する応答発話をみると、母語話者の使い方と似たような特徴が確認され、興味深い。次の例10の母語話者JP４の言いさしに対するCN５の応答は、先述した例４のCN６の応答と同様に、即ち両方ともタイプ３の応答に当たるが、その類似点を確認してみよう。

例10：日本語の学習について（データ５）

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発　話　内　容
208	**200**	*	**CN５**	**あのーその、その時はあの、簡単な日本語の、単語もね、少しだけ勉強しましたけど。**
209	201	*	JP４	うん。
210	**202**	*	**CN５**	**あのあの、本気に本気に日本語を勉強する時は、大学、大学時代。**
211	**203**	*	**JP４**	**うんうんそうですよね（うん）、それにじゃー元々は見てただけだけど＜笑いながら＞。**
212	204	*	CN５	うん、はい。
213	**205**	*	**JP４**	**大学でちゃんと勉強したんですね、日本語。**
214	206	*	CN５	はい。
215	207	*	JP４	うん。

例10は、CN５は208行目で「日本語の、単語もね、少しだけ勉強しましたけど」と言いさし発話をし、大学に入る前の日本語学習はインターネットを通じて単語レベルで勉強したに過ぎないことを話している。それを受け、JP４は209行目で相づちによる応答をし、CN５の言いさしを受けている。さらに、CN５は210行目で「本気に本気に日本語を勉強する時は、大学、大学時代」だと体言止めによる言いさし発話を発している。

またその言いさしに対し、JP４は211行目で「うんうんそうですよね」という相づちに加え、「それにじゃー元々は見てただけだけど」とコメントを付け加えた応答をしている。そして、212行目のCN５の「うん、はい」といった相づちの応答を受けながら、続く213行目で「大学でちゃんと勉強したんですね、日本語。」と先行するコメントによる応答発話の内容を補い、確認を行う発話でCN５の210行目の言いさしを丁寧に受け、フィードバックしている。JP４のこのような言いさしへの応答発話は、会話の進行がよりスムーズになされることに貢献していることが分かる。

またこのようなタイプの応答は先述した例４のCN６の応答と類似しており、即ち母語話者と接触経験のある学習者はともに言いさし発話に対し積極的に相づちに加え、コメントや関連する情報提供の発話を付け加えることで、相互行為の構築を志向することが確認できる。

以上の事例から学習者が話し手となり言いさしを使用している場合でも、また聞き手として応答を行う際においても、学習者のもつ接触経験は言いさし使用や会話の展開に影響していると考えられる。

５．まとめと考察-日本語教育への示唆

5.1　学習者の言いさしの応答からみる日本語教育の課題

本稿では言いさしの応答について５つのタイプの例を取り上げた。分析の結果、どのような応答タイプが現れるかは、言いさしが使用される文脈の状況（省略可能な情報）はもちろん、話し手がどのような会話展開を期待しているか、また聞き手がそれをどのように読み取っているかによって異なっていることが分かった。

しかし、聞き手が話し手の発話意図や会話展開の期待を瞬時に把握し、それに合うような応答タイプを選択することはそう簡単ではない。とくに初対面場面で、日本語母語話者との会話に慣れていない海外の日本語学習者の場合、言いさしの応答タイプの適切な使用はなかなか難しいと考えられる。それは今回の調査において傾向として学習者の言いさしの応答発話がタイプ１とタイプ２が多かったことからもうかがうことができる。とくに、言いさし発話に対する学習者の応答発話の欠如は、期待されたターン交替がうまく機能せず、沈黙が起きたり、話し手が再びターンを取るという調整により、一方的な会話展開になってしまうという問題も生じていることが分かった。

また不十分な応答も問題になることがある。例えば、相づちの応答があった場合、それが話し手の言いさしに対する十分な応答になっていない場合は、話し手は再びターンを取り、新しい質問をするという調整を行っていることからもうかがえる。

一方で、学習者の応答発話のなかには、タイプ４とタイプ５のようにターン交替とともに先行発話に関するコメントや、新しい話題での応答発話も使用されていることが分かった。ターン交替がなされ、実質発話を伴う応答になっているという点では、話し手の期待される言いさしの連鎖の形になっているようにみえて、会話進行上の問題もないように思われる。

しかし、タイプ５の応答においては新しい話題での応答発話の開始が唐突であるために会話の相手が戸惑う場面もしばしば観察される（e.g. 例６）。楊虹（2016：106）は中国人学習者の接触場面の話題転換について調べており、中国人母語話者の場合、新しい話題の導入において話題終了を明示的に示さない導入が多くみられ、それが日本語母語話者にとって唐突な話題転換と感じる要因になっていると指摘している。このような事例はとくに文法的には問題にならないために学習者の習得問題として扱われないことが多い。接触場面において会話の進行がスムーズではなく、なんとなく不自然に感じられる要因の一つには、こうした学習者の母語話者の言いさしに対する応答発話をめぐる問題が関係していると言えよう。

日本語教育においては、言いさしの形式に関しては教科書の中で一部扱われることもあるが、会話におけるターン交替としての働きや、それに関わる応答発話のことはまだほとんど教育が行われていないのが現状である。しかし、最近のようにオンラインによる接触場面の会話の機会が増え、接触場面の参加がより頻繁になっていることを考えると、今後の日本語教育においては会話の相互行為において言いさしとその応答発話がどのように機能しているかについても教えていく必要があるだろう。

言い換えると、単に言語構造として言いさしだけではなく、会話における相互行為としての言いさしの働きやその応答をめぐる連鎖についても教えていく必要があるだろう。またその際、本稿でみてきたような応答タイプとその連鎖に注目することは一つの有効な手掛かりになると考える。

5.2　オンライン環境と接触経験からみる学習者の習得問題

対面接触場面よりターン交替が困難であるオンライン場面においては、学習者とのインターアクションをより円滑に進行させようと、母語話者の意識的な働きが予想されている（尹2005）。なかでもできるだけターン終了を明瞭化するための自己調整が目立つ。例えば、本稿の分析では、会話例７のように、言いさしの後に対面会話よりはっきりとした間を置いたり、笑いのような非言語行動を付け加えるといった終了マーカーを積極的に使うことで、相手へのターン交替のサインをできるだけ分かりやすく伝えようとする調整がみられている。

さらに、母語話者はオンラン会話のことを意識し、ターン交替の手続きを明確にするという調整も行っており、その具体的な発話の調整として言いさしと、その応答発話を会話の相互行為のなかで巧みに使用していることである。このような母語話者のオンラインの接触場面における調整行動は、学習者においても当然必要なことであり、そのことは学習者の接触経験と言いさしの関係を分析した本稿の事例（例９と例10）からも確認できた。そこでは、接触経験が多い学習者と母語話者が発する言いさしの応答が会話の進行を円滑にする働きとなっていることが確認できる。

このように言いさしは、話し手がいま相互行為のなかで何をしており、どこに向かおうとしているかを、会話の参加者達が認識できるようにするための手掛かりになっていると言える。今後の日本語教育研究においては、こうした相互行為の視点を念頭におきながら、対面による会話だけではなく、オンライン会話における事例をも多く分析していくことが必要であり、そうすることで多様な環境での日本語の会話や言いさし習得も可能になると考える。

６．おわりに

本稿では会話における言いさしの応答タイプとして５つを想定し、その実際の現れ方をオンライン接触場面のデータから分析・考察した。その際、学習者の応答発話の問題も一緒にみるために接触場面のデータを使い分析を行なったが、言うまでもなく、応答発話のタイプの有効性を検証するためには日本語の母語場面による分析も欠かせない。

また本稿は会話の事例分析に焦点を当てたため、言いさしやその応答発話の傾向を示す量的な分析まで示すことはできなかった。母語場面での検証や量的な分析を加えることで言いさしの相互行為における習得問題のパターンをより明らかにできると考えており、それについては今後の課題としたい。

<文字化の記号凡例>

記号	意　　味
。	１発話文の終了。
？	疑問形に付ける。「？」の後に「。」を付けることで１発話文が終了したことを示す。
”	発話文の途中に相手の発話が入った場合、前の発話文が終っていないことをマークするために付け、改行して相手の発話を入力する。
/	発話文が終了していないラインは、「/」で発話文の未終了を示す。
…	音声的に言い淀んでいると聞こえたもの。

＜　＞{＜} ＜　＞{＜}	同時発話されたものは、重なった部分双方に＜　＞でくくり、重ねられた発話には、＜　＞の後に、{＜}　を付け、そのラインの最後に句点「。」または「„」を付ける。
【【 】】	第１話者の発話文が完成する前に、途中に挿入される形で、第２話者の発話が始まり、結果的に第１話者の発話が終了した場合。
＃＃＃	聞き取り不能であったもの。
↑→↑	イントネーション。
（　）	短く、特別な意味を持たない「相づち」。
＜　＞	笑いなどを伴う場合<笑いながら>。なお、笑い自体が何らかの応答になっている場合は１発話文となるか、発話文のなかに「ははは」等と記し、発話内容として示す。
（<笑い>）	相手の発話の途中に、相手の発話と重なって笑いが入っている場合は、短いあいづちと同様に扱って、（<笑い>）とする。
《少し間》	話のテンポの流れの中で、はっきり「間」が感じられた際につける。本研究では0.5秒未満の間を《少し間》とみなし、《沈黙　秒》と区別する。
《沈黙　秒》	0.5秒以上の「間」は、沈黙として、その秒数を記す。沈黙自体が何かの返答になっているような場合は１発話文として扱い１ラインとするが、基本的には、沈黙後に誰が発話したのかを同定できるように、沈黙を破る発話のラインの冒頭に記す。

参考文献

陳文 敏（2000）「日本語母語話者の会話に見られる「中途終了型」発話―表現形式及びその生起の理由―」『言葉と文化』１ pp.125-142

柏崎秀子（1993）「話しかけ行動の談話分析―依頼・要求表現の実際を中心に―」『日本語教育』79、53-63、日本語教育学会

楠本徹也（2015）「中途終了型発話文「～けど」「～ので」の要求・断り行為場面における待遇的談話機能」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』41、47-60、東京外国語大学留学生日本語教育センター

高民定（2020）「日本の外国人居住者の言語環境と談話管理―接触場面における「言いさし」の分析を中心に―」『国際教養学研究』５、33-54、千葉大学

고용진（2020）「일본어 ‘미완결발화표현’의 담화기능」『언어학연구』25-１、1-21、한국언어연구학회

永田良太（2015）「談話展開から見た接続助詞ケドの言いさし表現―トピック展開とターン・テーキングに着目して―」『日本語学』34（７）、14-24、明治書院
村岡英裕（2020）「オンライン会話の管理と自己呈示―３者会話の事例をもとにした考察―」『多言語社会と言語問題シンポジウム2020-2021予稿集』27-29、言語管理研究会
荻原稚佳子（2008）『言いさし発話の解釈理論―「会話目的達成スキーマ」による展開―』春風社
荻原稚佳子（2015）「話し手の言いさし使用の実態と聞き手の解釈―会話の目的を基にした推量を中心に―」『日本語学』34（７）pp.52-65　明治書院
朴仙花（2008）「現代日本語における接続助詞で終わる言いさし表現について―『けど』『から』を中心に―」『言葉と文化』９、253-270、名古屋大学
白川博之（2009）『「言いさし文」の研究』くろしお出版
髙木丈也（2012）「日本語と韓国語の談話におけるいわゆる「中途終了発話文」の出現とその機能」『社会言語科学』15-１、89-101、社会言語科学会
筒井千恵（2008）「フォリナー・トークの実際―非母語話者との接触度による言語調整ストラテジーの相違」『一橋大学留学生センター紀要』11、79-95、一橋大学
宇佐美まゆみ（2011）基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese：BTSJ）」URL：http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/btsj.htm
柳田直美（2002）「非母語話者との接触場面において母語話者の情報やり方略に接触経験が及ぼす影響―母語話者への日本語教育支援を目指して―」『日本語教育』145、13-24、日本語教育学会
吉田睦（2013）「ビデオカンファレンスにおける海外日本語学習者のコミュニケーション―遠隔接触場面の課題と可能性」Speech Communication Education 26、25-44、日本コミュニケーション学会
横森大輔（2018）「会話分析から言語研究への広がり-相互行為言語学の展開」平本毅・横森大輔・増田真将伸部・戸江哲理・城温綾実編『会話分析の広がり』63-96、ひつじ書房
尹智鉉（2004b）「遠隔接触場面における調整軌道―ビデオ会議システムを用いた日本語教育の試み―」『日本語教育』123、17-26、日本語教育学会

注

1　荻原（2015：52）は、言いさし発話であるかどうかの判断には発話の終りがはっきりと分かるターン末の完成文の有無を条件としている。その際、倒置も言いさしの表現形式に含めているが、本研究では、倒置は言いさし発話として認定していない。

2　高木（2021：91）は、言いさしの認定条件として、形態・統語論の条件として、主節や主節の述部が文の語尾に現れていない発話を、ターン交替と音声については、ターン交替が起こる直前に現れ、意味によって区切りが明らかな発話であることを、発話意図伝達については、発話者の意図が対話者に推測可能なもので、発話者の主体的選択の結果として終了した形式をあげている。

3　本稿における発話権は会話における発話者の役割、すなわち「話し手」という役割の交替を意味しており、こうした会話に役割の交替は話者の交替と必ずしも一致するわけではない。

4　学習者CN１、CN２は高校の２年から日本語を学ぶ。学習者CN４、CN６は大学２年の時、編入で日本語科に入る。その前にはアニメやバラエティーなどで独学で日本語を身につける。学習者の接触経験に関しては、対面会話による接触の有無の他にも②オンライン会話による交流や③SNS文字による交流の有無も含めて聞いている。

5　オンラン会話では相手の視線の動きが分かりにくいから互いに確認のために対面会話のときより「間」をとりながら、つまり時間をおきながら発話する傾向がみられる。

6　本稿では、話し手から聞き手に発話権が移動することで、話者間の役割交替が起こる場合に関しては「ターン交替」と捉え、「話者交替」と区別する。

7　横森（2018）は相互行為言語学の視点に基づき、ある言語構造が相互行為の働きとして利用されることを「相互行為の資源としての言語構造」としている。また会話のなかで連鎖軌道の修正によりある言語構造が算出される場合は、「相互行為の結果物の言語構造」として現れていると指摘している。

8　チャンクとは、ことばを複数の構成要素に分化するのではなく、一つのまとまりにして記憶したり、使ったりする短い表現を指す。